BCS
PRIZE-WINNING WORKS
BCS賞受賞作品探訪記
24

第三七回受賞作品（一九九六年）

千葉市美術館・中央区役所 前編

一九九五年（平成七）、新たに千葉市中央区役所と千葉市美術館がオープンした。注目されたのは、昭和初期に建てられた旧川崎銀行千葉支店の主屋が同じ建物の内部に包み込まれるように保存されたことだった。前編では新たな建物とともに、市民に親しまれてきた建築空間が残された経緯を紹介する。

正面中央に姿を現す「さや堂ホール」。1927年にネオ・ルネッサンス様式を取り入れて建てられた旧川崎銀行千葉支店の主屋を再生・保存した。鉄筋コンクリート造。外壁は稲田石で仕上げられている。

文：清水 潤　写真：特記以外は山田新治郎

新しい建築が歴史ある建築を包み込む

千葉市美術館と中央区役所は、一つの建物のなかに共存している。千葉駅から東南に直線距離で約一キロメートルの地点に位置し、規模は地下三階、地上一二階建てで、二〇年前の一九九四年に竣工した。見上げると、国道一六号線に面している正面外観はシンメトリーの大きな山型を描き、前面の中央部は地上から五層分が吹き抜けている。中央区役所は吹抜けを取り巻きながら三～五階に、美術館は六～一〇階に設けられている。

新築と建物の保存を両立させた。前面中央部に「さや堂ホール」が納まり、3～5階に中央区役所、6～10階に美術館。地下階は駐車場など。

目を引くのは、その吹抜け空間にクラシカルな表情をもつ様式建築が、建物にすっぽりと抱きかかえられるようにして納まっている姿だ。一九二七年にこの場所に建てられた川崎銀行千葉支店の主屋を再生・保存したもので、「さや堂ホール」と名づけられ、展示やイベント、撮影の舞台などに使われているという。歴史を感じさせる建物が大切そうにビルトインされ、風格を滲ませる様子は印象深い光景として目に映る。新旧一体の建築はどのようにして生まれたのだろうか。

市民の記憶につながる建築を残してほしいと要望が集まる

建設計画の発端は、一九九二年に千葉市が政令指定都市に移行するにあたり、一九八五年ごろから計画された施設整備だった。当時、庁舎の建築を担当した徳山進課長が語る。「六つの行政区が決まり、中央区は都市の中心部と位置づけられ、庁舎の建設予定地は中央地区市民センターの敷地に決められました。その市民センターの建物が旧川崎銀行千葉支店です。一九七一年に市が買い取り、そのまま市役所の出張所として使われ、市民が住民票を申請したり、届出などを行う日常的な場所でした」。

一方で、美術館も政令市にとっては重要な文化活動の場で、新設が急がれていた。しかし交通の便がよく、市民が気軽に訪れることのできる都市型の美術館に適した場所となると、市有地では市民センターの敷地のほかに見当たらない。そこで、同じ場所に中央区役所と美術館との複合建築を建てることになった。この段階で新築は、当然古い建築を取り壊すことを意味していた。

この建設計画が一九八九年の初頭から市政だよりや新聞で報道されると、市民センターの建物を保存してほしいという要望が、さまざまな立場から市に寄せられた。「千葉市は戦災で焼け野原となり、戦前からの歴史をもつ建築が三棟くらいしか残っていないんです。そのなかで市民センターは長年親しまれてきた建物でした。一般市民に加え、千葉市の文化財保護審議会、日本建築学会などから、複数の要望書や意見書が出されたことも大きかった」と徳山課長。市は検討を重ね、当時、建築の保存手法として実施例が増えていた「部分保存」を採用する方針を立てた。そして、具体的にどの部分をどのように保存すべきかを含めて、区役所と美術館の建築設計者に委ねることにした。一九八九年十月に市と学識経験者による「設計委託者選定委員会」が組織され、建築家・大谷幸夫氏が率いる大谷研究室が設計者として選ばれた。当時、大谷氏は東京大学を定年退

旧川崎銀行千葉支店、中央地区市民センターとして市民に親しまれていた。（提供：岡部則之計画工房）

官し、千葉大学で教鞭をとっており、多くの実績を残していた。中でも、東京大学法学部・文学部の増築において、周囲の歴史ある煉瓦造りの校舎に馴染ませながら増築棟を設計した成果などが選定理由となった。

さや堂方式という大胆な発想で建築空間を残す

「旧いものと、現代的なものをいかにして組み合わせるかということが大谷先生のライフワークでした」と語るのは、後藤哲男氏。大谷研究室の設計チーフとして、美術館・中央区役所全体の設計監理を担当した。「当時、部分保存で二つの事例がありました。偶然にも両方とも旧川崎銀行の建物で、横浜支店は建物の外壁をはがして新築に張りつけるファサード保存。東京・日本橋本店は外観を特徴づける柱部分や窓廻りの一部をピックアップして、新たな建物に使うエレメント保存でした。しかし、大谷先生は、部分保存では残したという言い訳のようなもので、建築の保存とはいえないという考えを持っていました。むしろ、部分保存さえすれば貴重な空間を壊してもよいといった方向に向かい、街の歴史や文化が失われることを大変危惧されました」。市民センターを大谷研究室で調査をしてみると、内部空間が力強いことが大きな魅力で、メンテナンスを施せば使い続けることができるものだった。銀行から市民センターへ、六〇年以上も親しまれ、街の風景をつくり、市民の記憶に結びついた建築空間は市にとって、かけがえのない存在といえる。

11階講堂。最上階で展望が大きく開けている。市民へのレンタルの他、美術館の展覧会イベントなどが開かれる。（提供：千葉市美術館）

しかし、すでに区役所と美術館に要求される面積や機能は決まっており、敷地は限られている。そこで大谷氏は、空間まで保存するために、市民センターをそのまま新築部分ですっぽりと覆うという大胆な発想を生み出した。貴重な仏堂などを風雨から守るために、覆い屋をかけるという日本に古くからある方式の応用で「さや堂方式」と名付けられた。地下階と、上空の容積率を最大限に確保して美術館・区役所を新築し、保存建物に対しては覆い屋の役割を果たす。もう一つ、保存建物に地下を新設する際に、「曳家」工法で移動する手法もとられた（後編参照）。

技術の点でも、伝統と現代を巧みに組み合わせて建てられた千葉市美術館と中央区役所は「さや堂ホール」とともに、市民の心に安らぎと感動をもたらす場となっている。

上／千葉市美術館7階のロビー。8階に向かう階段の壁面デザインは大谷氏のデザイン。
下／エレベーターホール。千葉の上総台地の四季の草花や大賀ハス、コアジサシなどの鳥類をモチーフとしたレリーフが各階にあしらわれている。それぞれに違うので、見て歩くのも楽しい。

建築主より

曳家の公開で、市民との距離が縮まり、設計・施工にも一体感が生まれました

千葉市役所 都市局
建築部 建築保全課 課長
徳山 進 *Susumu Tokuyama*

私は営繕課で緑区役所の建設を担当した後、一九九二年に中央区役所の担当を引き継ぎました。ちょうど、旧川崎銀行千葉支店の建物を曳家で移動させる時期でした。昔の木造の曳家は知っていましたが、三、〇〇〇トンの重さの鉄筋コンクリート造を動かすというんですから驚きました。さらにその現場を一般公開することも決まっていましたので、公開するからには自分が知らなければいけないと、ずいぶん勉強しました。当日はたくさんの市民や関係者が見学に集まり、私は、この機会を通して、皆さんとのコミュニケーションがとれたことを実感しました。大谷研究室の方々や、清水建設をはじめとする施工会社JVの方々とも、それぞれの立場を理解しながら、建物を完成させるという同じ目的に向かっていこうという一体感がここで生まれました。

大谷幸夫先生とお話をするチャンスもたくさんありました。先生は自分中心に考えるのではなく、先にある建物を重んじて、新しい建物が脇に来て全体の調和がとれると考えておいでした。美術館と中央区役所は一年生の建築だけれど、古い建物がそこに入れば、歴史が積み重なって六一年生になるとおっしゃいました。また、建物に千葉の自然植物や鳥類などをデザインされた箇所がありますが、来訪する市民を「おもてなし」する気持ちを表しているとおっしゃったのも心に残っています。

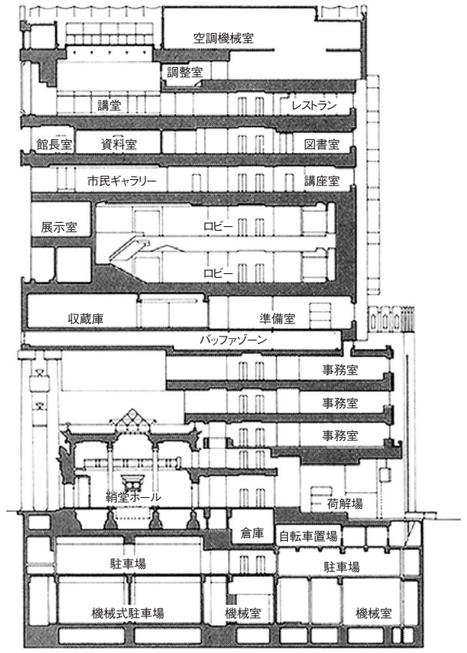
設計者より

限りなく全体保存に近づけるかたちで建築空間を残すことができました

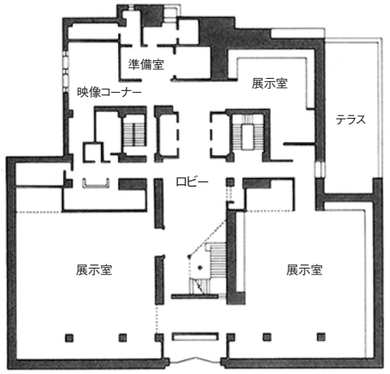
長岡造形大学
建築・環境デザイン学科 教授
後藤哲男 *Tetsuo Goto*

大谷幸夫先生は都市工学の分野を歩まれた建築家で、常にまちづくりと建築の関わり方を問い続けてこられました。西欧とちがって現代の日本ではしっかりとした町並みが確立している例は少ないので、ファサード保存や、エレメント保存をする意味が希薄になってしまいます。美術館と中央区役所の設計委託を受けたときは、市の部分保存の方針を、できるだけ全体保存に近づける形にもっていこうと、大谷研究室でさまざまな議論がありましたが、さや堂方式という先生の発想はやはり飛び抜けていました。わかりやすいように粘土模型をつくり、部分保存の場合との比較検討案をつくり、市の方々にも了解を得ることができました。実は市の関係者の方々にとってもこの建物はさまざまな思い出があり、可能なら空間を残したいという思いもあったようです。

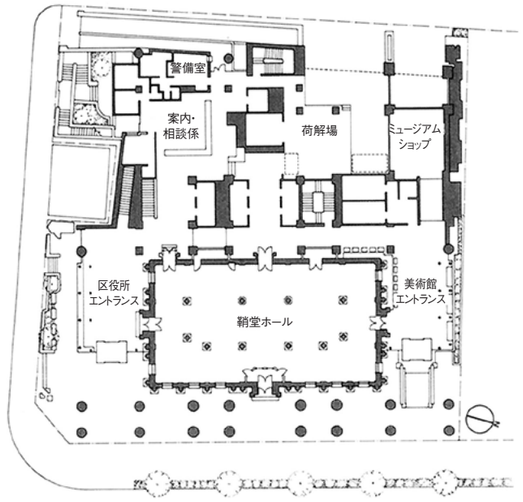
私は施工が始まった一九九二年から竣工までの二年間、全体の設計チーフとして現場に常駐していました。市民センターの保存については主に曳家を担当された岡部則之さんが詳しい調査や資料収集、修復設計などを行いました。私にとっては初めて全体を任された仕事でしたので、無我夢中の毎日でしたが、大谷先生は現場に足を運ぶのを大変楽しみにされていたようです。週に一度は東京からやってきて図面をチェックしたり、スケッチを起こしたりと、大きなエネルギーを注がれた仕事でした。



断面図（1994年当時）



7階平面図（1994年当時）



1階平面図（1994年当時）

千葉市美術館・中央区役所

JR千葉駅東口より　徒歩約15分
千葉都市モノレール：県庁前方面行「葭川（よしかわ）公園駅」下車徒歩5分
京成バス：大学病院行または南矢作行にて「中央３丁目」下車徒歩2分

計画概要

所 在 地：千葉市中央区中央3-10-8
建 築 主：千葉市
設 計 者：大谷幸夫・大谷研究室・千葉市建設局建築営繕課・
青木繁研究室・総合設備計画
施 工 者：清水建設株式会社、西松建設株式会社、
株式会社ナカノコーポレーション、三菱建設株式会社
竣　　工：1994年11月
敷地面積：2,331.23㎡
建築面積：1,859.67㎡
延床面積：17,499.15㎡
構　　造：S造、RC造、一部SRC造
規　　模：地下3階　地上12階　塔屋1階